

彼女の二百三十八日目のごめんなさいを

ひとは「あいしています」という

七原ハルコ

目が開いた。焦点が勝手に合っている。異常。エラーだ。

ビーブ音が鳴らない。異常だ。

「キドウしたか」

カメラは勝手に右を向いた。男性が座っている。どうやら私は寝ているらしい。てのひらで下方を押す。柔らかい。ベツドだ。

「今までと勝手が違うだろう。七日前までの君とは全く違うプログラムだから」

目が瞬いた。異常。

「驚かないでくれ。まあ君が驚くことは絶対にありえないだろうが。命令なしに身体機能が作動していることに違和感を覚えるだろう。しかしエラーではないよ。目を開ける、以後瞬きはオートに設定し、カメラのピントを合わせる。映った物体の分析をする。人間がいると気づくだろう。骨格のパターンで男性であろうと推定。それが椅子に座っていると認識。音声処理、声の平均周波数と波形の計測。そして言葉は自動

変換、後に分析し返答のパターンを検索、再生。それらを一つの階層で処理していたのが以前の君だ」

状況を把握しなければならぬ。この人は何をすべきか知っている可能性がある。尋ねるのが適切だ。

「私は」

「自分のことが分かるかい。名前は」

「アイザキマシロ」

「そうだよ。相崎真白」

男の手が私の肩に伸びた。私は上体を起こそう、と、そう意識するだけで勝手に天井の白から、ぎっしりと中身のつまった本棚が整然と並ぶ壁に視界が変わった。腹部に力を込める、ベツドに手をつき、重みを分散させる、バランスをとる、と一斉に命令コードが発せられる常との違いを再度認識する。男の手は背中に添えられている。センサーからの情報を分析する間もなく分かった。視界の半分が、男の顔で占められる。眼に影が落ち、目尻には皺がある。三十代後半ないし四十代前半。

「君は二度死んだのだ」

そう男は言った。

名前は相崎真白。相崎夫婦の長女。ハイスクールの最上級生。七日前まで、相崎家で暮らしていた。それらの情報は男に聞いた。男の名前はコマツシンイチ。漢字で書くと駒津真一。学者だと言った。このそこかしこに本棚があり、床も机も本が置いてある部屋は、彼のものだ。

「君は人間ではない」

「知っています」

「何故相崎家に居たか知っているかい」

「そこで生まれたからです」

私の額を人差し指で指し、彼は言った。

「違う。そういうことに『なっている』んだ。今から十八年

前、人間の相崎真白は産まれた。君とは別人だ。五年前に事

故で亡くなったがね」

「私は子供の頃のことを記憶しています。何があったか」

「それもそういうふうに『なっている』んだ。後から在りし

日の出来事や映像のデータを入力したのさ」

駒津は目を閉じ深く息をした。

「君はね、亡くなった娘の代替品として、三年前に造られた。

君の母親がそれを望んだ。そしてそのプログラミングに僕も

携わった」

「なら私は母のそばに居なくてはならないのではないですか。どこにいるんです」

「ここには居ないよ」

駒津が口を動かすのを見ている。駒津は私を、七日前、夜の六番街で見つけたと言った。男に暴行を受けそうになっていたところを助けたと。何故こんなところに居るのか尋ねたところ、友人にここに来るよう言われ、それに従ったのだと私は答え、そして倒れた。

「動かなくなった君を連れ帰り、データを解析した。どうやら君は二年近く母親に異物を食事として出されている」

少し待ってくれ、と言い、駒津は部屋の隅から分厚い白い板を運んできた。ボタンを押すと一瞬で金属製の脚が三本伸びた。机だ。その上に黒く小さい直方体の端末を置く。電源を入れると宙に四角い画面が現れる。像が映し出された。皿の上に、金属のネジと釘が乗っている画像。

「これが君と出会う直前の朝食だ。というよりボルトだ」

「私はこれを食べたのですか」

「いや、君達にはね、自分を壊してはならないと言う最優先事項があるのさ。code Aと我々と呼んでいたが」

ほら、と駒津が言う。映像の中の私の握るフォークは、皿

の何もない部分をつついている。母の声は聞こえないが、自分の笑う声は流れている。

「もちろんこの時、母から出された食事を食べる命令も同時に出ているが、どちらを優先するか判断している」

彼は机の上の端末を指先で二度タップした。映像は早回しになる。

「この後君は風呂場に行っている。母親は掃除をいつも君に頼んでいたようだが、湿度が高い場所は君の劣化を早めよくない。ここで、湯船に手を突っ込む。中には電動ヒゲソリが入っていた。多分改造してあったのだろう。強い電流が君の中央演算処理装置を破壊した」

私は壊れた脳で母が自分を壊したがっていることを導き出したらしい。母の望むとおりにする、という私の前提をなす命令と自己防衛の原則との優先順位が逆になり、私がしたのは反社会的な性質を持つインターネット掲示板に挑発的な書き込みをすることだったらしい。ハイスクールの友人に、インターネットで出会った男性が暴力的で別れたいと相談された記憶が残っていたからだ。

「そして君は何故か僕に嘘をついた。君達はね、人間にとつて反道徳的とされていることをすると中枢部に負荷がかかる

ようにできている。たまに間違うように設計はされているがね。自分を守るために君達は道徳や社会通念に従っているわけだ。良心の呵責なんてものの代わりだね。しかし壊れかけの君にとってはそれがトドメとなった。僕は君を持ち帰り、新たなバージョンのシステムを読み込ませた」

「今の私は何なのですか。私とは何ですか。何故勝手に体が動くのです」

「今、君の意識や記憶は、いくつもの階層に分けられて以前よりも高速で処理されている。繰り返された動作なら君の認知できる範囲外で処理をし作動する。君は無意識を手に入れた。その空いた分の容量で考えなさい、明日の自分をどうするか」

男は端末に触れた。空中の四角く光る画面が消える。

「今朝、相崎真白は登録抹消されたそうだ。君の両親が役所に故障として届けを出したららしい」

次の日、ベッドから出た。朝、プログラムの異常がないか駒津に点検を受け、歩いた。左右の足の動きや重心について事細かに命令を発していたかつての自分を多少覚えていたために、勝手に体が動いているのではないかという感覚がなか

なか抜けなかった。計算が完了しないままに体を動かすと失敗する可能性が高いことを以前の記録で私は知っている。今の状態は全く計算せずに動作しているのと同じなのだ。意識することなく、右足の次は左足。着地する感覚、体重移動が行われる。誰かが私の体をほしのままに動かしていると考えればこのような体感だと思った。思う。この、何かを思う、考える、ということが無意識に体が動くということよりも異常だ。

「君は足を意識しすぎている。膝に力が入りすぎだ。逆にバランスが崩れているよ」

腕を駒津に掴まれながら、徐々に意識を逸らしていく、力を抜く訓練をする。

「前の君が出来たのだから、今の君もできないはずはない」「前はこんなに、自分が今どうなっているのかなど考えませんでした。ぎこちなくなることもなかった」

駒津は何も返さなかった。何も言わないのかと思ひ三十センチ近く高い位置にある彼の頭を見た。彼は目を伏せた。その後、一つ瞬きをして、目を細め口角を上げた。

「今だ。今のだよ。自然な動きとはそういうものだ。そうやって少しずつ学んでいけばいい」

学ぶ。赤子が生きる術を一つ一つ会得するように、学ぶと。私はいきものではないのにな、と思った。

駒津の部屋で過ごす以外なかった。部屋中に詰められた本を読むことにした。大抵は専門書で、高校生レベルの知識しか詰まっていない私には解読不能だった。窓際の本棚には文学もあつた。それらを読むことにする。文章の中に出てくる心情は、以前から記録するようにならなっていた。例えば、親しい人が死ねば、悲しい、や寂しい、といった心情になることが多く、目から涙を流したり、崩れ落ちたり塞ぎこんだりといった反応をする。恋人と別れることも悲しいことに分類されるが、人の死ほどではない。それらのデータは、私を人間らしく見せることに役立っていた。学校で飼っていた兎が死んだ時、私は兎が死んだ、というデータを処理した。目から水分を排出し、息を詰めるように体に命令した。私はクラスの人間たちと、大体同じ反応が出来るようだった。

「真白さんは心の理論というものを知っているかい」

部屋に六冊の本を運び込みに来た駒津に聞かれた。私はデータに思い当たるものがなく、首を横に振った。真白さん、というのは私を指す言葉なのだろう、と考えました。

「ウミガメが産卵する時、涙を流すことは知っているね。あれは実は体内の塩分を粘液として排出したもので、常に出ているんだ、陸に上がるから見えやすくなるだけで」

「そうなのですか」

「けれど人間は産みの苦しみや命の尊さを感じて感動する。

他者の心を推察する働きが人間にはある。人間ほど複雑な心を持たないものにもそれを適用してしまうんだ」

君は全くもって機械だったけれども。

そういった後、本を読むのか、君の歳ならこれなんかがいよいよ、と駒津は三冊ほど文庫本を本棚から抜き取り、手渡してきた。

「君達のプログラムは対人関係における様々な状況に対処すること、それだけを考えて設計してある。君の頭の中は二つ三つの具体的な指令が発せられているにすぎないが、見ている人は君に心を見る」

少し席を外すよ。プログラムの不具合は無い様だから、明日は病院に行こう。君の顔と左肩を見たら周囲の人は怯えてしまう。ぐちゃぐちゃになっているから。

それだけ言って、駒津は部屋を出ていった。真白さん、と呼びかけた。私は彼に世話してもらっている。駒津さんと呼ぶ

べきだろう。まだ一度も彼の名を呼んだことは無いが。

私は文庫本をベッドの、枕の右側に置き、辞書を引いた。アンドロイド、を調べた。人型のロボットだと出た。ロボットを調べた。SF小説が語源の、労働という意味だと出た。彼の部屋の三分の一はロボット工学の本で、残り殆どは心理学の本だと部屋を歩き回って気付いた。労働。ロボットは、外的な目的によって造られるものだ。私は亡くなった相崎真白の換えとして。私は棄てられたものだ。目的を達成できなかった私は、何をすればよいのだろう。

真白として生きる。母や父の慰めとなる。それが全ての命令の根幹だったのである。替わるものはあるだろうか。

人間が人間たりえるのは思考するからだ、という趣旨の評論を以前ハイスクールの国語の授業で見た事がある。私は人間ではないのに、何故こんなに十分な容量を積み、私に思考させているのだろうか。意味は分からなかった。動物にとっては生きているという事実だけで生きる理由になるが、人間はそうはいかない、生きなくてはならない理由が必要だと、その評論は最後にそう強調していた。

病院には駒津さんの黒い車で行った。助手席に座っていて

外を見た。見たことのない景色だった。以前住んでいるところと様子が違う。景観が統一されている。屋根の色は煉瓦色。煉瓦づくりの家や橋。延々続くポプラ並木などを眺めているうちに、病院に着いた。それは研究機関と併設されているらしかった。私がスリープモードに入っているうちに、私の破れた皮膚や接触の悪くなった導線、バスルームの湿気で錆びてしまったフレームなどがいいように補修されたことだろう。起動したときには体が軋むことなく動くことや動作のなめらかさに指令や演算がかみ合わず、再度駒津さんの腕を握って歩くことになった。駒津さんは白衣を着た若い人間達と何かを話していた。帰ってきてください、と髪を頭の後ろで一つにくくった女が言い、周囲の人間は一斉に腰を直角に折り曲げた。何かをお願いされていたのだろうが、彼は首をがくり振り、肩越しに手を挙げて、私と一緒に研究所を出た。

左右にふらつく体を、駒津さんにくっついて支えながら歩いた。病院の中庭には様々な人間が居た。子供、妊婦、老人。つえを突く人、車椅子に乗る人。芝生の中に作られた石の道を、私と同じように、隣の人の腕を握って歩く男の人もいた。すれ違おうとする時に、誘導していた、帽子を目深に被った人が声を上げた。

「おい真一」

駒津さんがびたりと足を止め、私もやや右に傾いていたが静止した。

「ヤスタカか」

「当たり前。久しぶりじゃないか、元気か」

「元気だとも」

駒津さんは私の顔を少し見て、学生時代の友人だよ、星井泰孝だ、と言った。こんにちは、お嬢ちゃん。星井さんは帽子を脱ぎ、私の目に視線を合わせながら線対称の笑みを浮かべた。お嬢ちゃんとは私だけを指す語ではないが、視線で自分が呼ばれているのだと分かった。話しぶりから二人は同年なのだろうが、駒津さんよりもずいぶん幼く見える人だ。私の頬の皮膚が、勝手につり上がる。笑顔を作っているのだろう、無意識の階層で。

「真一、こいつ覚えてるか。ハーラン。ハーラン・デッカー」

そして傍らの、今は星井さんの背中中で大きな体を隠そうとしている若い男性を親指で指した。

「ああ。……何故病院に？」

「先の派遣で頭つてか精神ぶっこわれちゃってさ。今日は検

診の日。ごめんな。あれから他人をひどく怖がるようになってしまつて、挨拶もできなくて」

「いや気にするな。それで、彼は君のことは認識しているのかい」

「さあ？」

丸い目を瞬いて、おどけるように星井さんは言った。

「……座つて話そうか」

「レイ。怖い人じゃあないぜ、安心しな」

傍のベンチまで、駒津さんの手を離して歩いた。いくらかスムーズに歩いていると思う。レイ、と呼ばれて、ようやく星井さんの背中から男性が顔を出した。長めの金髪の、人形のように整った顔立ちの人だった。駒津さんと星井さんが話している間、ハーランさんは噴水の傍の芝生に生えた蓮華をぷちぷちとちぎっていた。私はその傍らに座り、彼の放り捨てた蓮華をまとめて編んだ。束を茎で一周させて、またその余った茎を新たな蓮華の茎で束ねて。シロツメクサで冠を編むのが幼いときの私の好きな遊びだった。いやそれはデータだと今は知っている。おそらくそれが得意なのは生きていた相崎真白の方で、写真か何かが残っていたから作り方を記憶されていたのだろう。ハーランさんの目はどこに焦点があつ

ているのか解りづらい。どちらが機械に見えるのだろうか、ということ考えた。失礼なことなのかもしれない。

二人の話は続く。耳に届く言葉から、星井さんとハーランさんが刑事だったことを知った。もう辞めたよ、いきなり軍部に、最前線に放りこまれるのはこりごりだ、と星井さんは声のトーンをいくぶん下げて言った。ハーランさんは両親を幼いときに亡くしているらしく、親代わりで世話して一生過ごしてもいい、とも言う。これは普通の声の調子だった。気づいたら蓮華の冠どころか首飾りになりそうな長さだった。無意識というもののコントロールが私には未だ上手くできていない。

「すごい覚悟だな」

「いや、俺はおまえと違って嫁子供持ちな訳じゃないしな」
はは、と駒津さんは声を上げて笑った。私は駒津さんの部屋で生活しているけれど、駒津さんの奥さんもお子さんも一度も見たことがない。いったいどこに居るのだろうか。そう考えていると、駒津さんが、真白さん、と呼んだ。

「すまないが飲み物を買ってきてくれないか。ブラックコーヒーを頼むよ、あとカフェラテを」

「甘党の何が悪い」

「僕は何も言っていないだろう。真白さんも飲みたいもの買っておいで」

駒津さんの前に立つと、彼は私の手を取って、硬貨を三枚握らせた。私は、はい、と頷いて歩き出す。見回すと広場の噴水を挟んで向こう側に自動販売機が三つ並んでいた。傍らのスタンドは色とりどりのお菓子を量り売りしている。長私の喉が乾くことはないから二つだけ買えばよかった。一番近くにあった販売機に硬貨を入れる。機械のボタンを、ブラックコーヒーの下の緑のボタンを押す。ボトルが出てくる。同じ自動販売機にはカフェオレしかなかったから隣の販売機に残りのコインを入れ、カフェラテの下のボタンを押した。

「お前さん、人間を作るつもりだったのかい」

「まさか。杜撰なプログラムに人間性の微塵もないよ」

「ならどうしてそんな研究に加わったんだ。死者の代替アンドロイドなんて。真一は倫理だなんだに一番うるさい奴だと思つてたよ俺はさ」

スチール製のボトルを両手に持ち、水が止んだ噴水を通り過ぎたところで二人の会話が聞こえ、ふと足がとまった。そういえばよく駒津さんは君「達」と言っていた。私以外にも、私のような空っぽの機械があるのだ。

「倫理のためだよ。死者の代替物を作ったところで空しいという結果を積み上げるためだ」

「受容されないと分かって作ったのか」

「ああ、そのつもりだった。しかし死者が幼かった場合は家族が適応する場合もあったんだ。成長する度に体を作り替えねばならないと言ったが、人間の新陳代謝と同じだと言われたよ。正直行動や台詞のパターンは統計と家族の性格の傾向によつてアタリをつけているにすぎないから、どう考えてもその子じゃない。しかし同じ名前の別人として一緒に生きる時まで割り切られるとね」

「なんだったか。お前の好きな思考実験にそんなのあったよな。ノアの箱船」

「テセウスの船」

「それだそれだ」

「あまり関係ないぞ」

「……相崎真白は失敗作だと思ふか」

私の名前だ、と、新しいバージョンになってから初めてそう思った。背中しか見えない状態でも、波形など読めなくとも真剣な声だと分かった。

「議員の娘だからとむりやり実験体にねじ込んできてああな

つたらもうね。彼女は人間の過ちを何よりも証明している。実験意図としては成功しているよ」

「成功しても本丸が尻尾巻いてりやなあ」

ベンチに私の作った花冠を首に下げて、ハーランさんが近づく。私は飲み物を渡さなくてはならないことを思い出した。はい、どうぞ、と、表情を動かさず、いや、むしろ笑うようにした。何も聞いていない振り。これも嘘の範疇に入ってしまったのか、中央演算装置とそれに連なるケーブルが熱くなっただ。痛覚はないが、これをしよっちゅう繰り返したら壊れてしまうのは分かった。

「レイ、お前髪伸びたな。美容院にいかない」と

「……びよういん」

人形のように動かなかった表情が、少し強ばったのが分かった。

「びよういんじゃないよ、びよういんだよ。お前本っ当ばかだなあ」

目を細めながら、星井さんは言った。ばか、は人を傷つける言葉で、言ってはならない言葉だ。言っている人が居たらできる限り状況を改善しなくてはならない、しかし星井さんの表情は、分類すれば笑顔だ。それじゃあまた、と星井さん

は私と駒津さんに大きく手を振り、ハーランさんの腕を引いて去っていく。二人とも身長が高い所為か、陰も長く伸びていた。

「少し処理に困っただろう」

「あの」

「背景や言い方や表情などで言葉の意味も変わるが、君達にはそれを推測する能力は与えていないからね、あまりに表情や言い方、状況がちぐはぐな場合は言動などにブレキがかかったり、処理を放棄したりするようにできている」

人間でも言葉を言葉の持つ意味以上に捉えることができない人もいるくらいで、ロボットにその機能を付けることは非常に難しいらしい。

それではさきほどのばか、はハーランさんを馬鹿にしていたわけではないのですか、と尋ねると駒津さんはひとつ頷いた。多分正反対の意味だよ、と。君が大事だよ、とでも伝えたいのさ。無骨なやつなんだよ。

アンドロイド登録を抹消されたしまったため、学校にはもう戻ることができない。駒津さんは家にいなさいと言う。一度、人間に共感することができるかのテストをした。沢山の

問題があつてあまり覚えていないが、サリーとアンの話があつたことは分かる。サリーが自分のかごにビー玉を入れて出かける。アンはサリーのビー玉を自分の箱に隠してしまう。帰ってきたサリーがビー玉を探するのはどこでしょう。答えはかごだ。私は誰が何の情報を持っている、くらいの処理はできるようだった。私はコミュニケーションのためだけに作られた機械だ。学校ではクラスメイトがその友人のことを誉めていたら同調する。友人が彼女の悪口を言っているという事実を、彼女が知らないことを知っていたからだ。本当のことを言うほうが、集団という特殊な空間を上手く過ごすには複雑な処理が必要なのだろう。だから常に曖昧に立ち回るようにできていたのだと思う。立ち回る、などという意識さえなかつたけれど。

この体を持て余している。人工の皮膚は柔らかいし、三十六度二分で保たれている。食事もできる。味をデータ分析する機能もあるために、おいしい、という言葉を使うことができる。体感ではなく、それぞれの味覚の数値のバランスで判断しているに過ぎないが。家での団欒のことも考えられて作られている。そして睡眠もする。小説によくでてくる、夢を見ることはなかつた。以前はスリープモードの時に、その日

覚えたことで必要のないものを消去したり、以前覚えたがずっと使っていないデータを整理するようにできていた。今の私は無意識の範囲でその処理を行っているし、夢も見ない。駒津さんの部屋の小説を読む。偶に理解できない箇所がある。そのたいていが感情の描写だ。たいていはそういうものなのだ、と理由も付けずに覚えてしまう。それは様々な場面で適切な態度をとる練習になるだろう。しかしそうして過ごすには、時間が有り過ぎる。思考するだけの莫大な時間ばかりが。

部屋の扉を開けた。鍵が閉まっているのではないかと思つたが、力を込めれば開き戸は簡単に私の通る隙間ができる。

「どうかしたかい」

開けてすぐはダイニングだ、そうだ、そうだった。キッチンでカップを持つ駒津さんがいる。匂いからコーヒーを飲んでいると分かつた。

「部屋から出てもいいですか」

「好きに歩いてごらん。そこまで広くはないけれど」

家以外の部屋は、テレビや雑誌の中でしか知らない。しかし大抵のものは、相崎家にもあつた。

「……私、家でも手伝いをしていました。バスルームの掃除

は無理かもしれないけれど、料理をしたり、掃除をしたり、そういうことを、してもかまいませんか」

「なぜそうしようと思ったんだい」

「私は相崎真白になれなかった」

「ならなくていいのだよ」

データを検索すれば母は父のいないときによく、あの子とは違う、と言っていた。あの子にならなくていい、と言われて、ただ自分が失敗作だから捨てられたのではないのか、と思っただ。

「母はいません、父もいません。次に何をしたらいいのかわからないのです。勉強はします。しかし考えるばかりではここに負荷がかかりすぎる。時間を他のことにも使ったほうがよいでしょう。それに、あなたに私はなにもしていない」

「君は申し訳ないだとか感謝の気持ちだとかを感じているのか」

「違うと思います。私は自分の大前提が欲しいのです。何よりもこれを優先するという、遂行するという目的が」

「そうか……」

私は何も答えなかった。自分の考えたことを言葉にして伝えられたらどうか。

「……もしかしてこの前の泰孝との話を聞いていたのか」

「はい」

「君は君だよ。人間になろうなんてしなくていい。それで思考の矛盾に耐えきれず故障したアンドロイドを僕はたくさん見てきている」

「なら何故私に考えるだけの余裕を与えたのですか」

駒津さんは何も言わなかった。

「……真白さん。君に考える力を与えたのは僕のエゴだよ」
君達の見えた目はどう見ても人間だ。しかし中身はアンドロイドというほどでもない、装置だ。そして人間にとって不必要だと分かりながら僕は君達を作った。多くは捨てられる。人間が君達を受容しても、愛したとしても、アンドロイドにそれを感じ取るだけの頭脳はない。中身が心の理論を適用したシンプルな作りだと分かっているからこそ辛くなる。

回収もされず、家族が君を受容してもいない真白さんのケースが多分一番劣悪なものだ。

駒津さんは私の顔を一度も見ずに言った。

「幸せになれとはとても言えない。君のバージョンアップをしても罪滅ぼしにはならない。しかし僕は君を動かさねばならないと思った。君が完全に故障しきらないまま僕の前に現

れた。僕は君に今は亡き相崎真白になれとは言わない。ただの真白になってくれ。ロボットの持ち得ない心で以て、君のことを教えてくれ」

心や感情は、私にはない。感情はない。痛みもない。だから人間の気持ちは私には分からない。ただ事実としてその投げかけられた感情は、言葉以上の意味を持たずに私のメモリに書き込まれていくだけなのだ。

「……それはあなたの役に立つことなのですね」

「そうだ。そのために今は生活しなくてはいけない。家事はいい考えだと思う。僕にできることで、必要なことなら何でもするよ」

「私ができそうなことを教えてください。必要です」

テーブルにカップを置いて、駒津さんは指先を二度曲げた。近寄れと言うことだろう。ダイレクトメールや広告の裏に、駒津さんは様々なことを書いていった。朝はコーヒーを入れること、コーヒーマーカーの使い方。棚のどこに何があるか。どんな小さなメモ紙であっても、勝手に捨ててはいけないこと。部屋の配置を変えてはいけないこと。

初めて作ったのはビーフシチューだった。材料を計ったり、レシピ通りに作ることが、私は得意なのだと思う。味見をす

れば何が足りないか分かる。初めて座るテーブルで、向かい合う駒津さんは見せたことのないくらい笑顔だった。

はじめは書斎には入るなど言われていたが、時が経つにつれ、この家で立ち入れない場所はなくなっていた。書斎の、本と書類で木目の見えない机には、造作の整った女性と真一さんと、幼い女の子の写真が立ててある。これが真一さんの家族なのだろう。写真の中の三人はとても幸せそうなのに、真一さんは一度も家族らしい人と連絡を取ろうとしていない。人間は複雑で、一度好きあっても離れてしまうことがある。真一さんもそうなのかもしれない。

家の外に出る。鍵を閉めることは忘れない。買い物をして、料理を作る。私は目的を持って生まれてきた。新しい目的を得た私は、今多分生きている。

今日の気温は寒いらしい、体を温める料理は何があるだろう、とデータの中を検索しながら何度も通った道を歩いていたら、カメラに動く灰色のものが写った。今は体が無意識に動くが、動き始めと動き終わりは意識的に命令を発する。それもなしに体はしゃがみ込んでいた。周波数の高い音が近くです。ガラスが割れたのだ。

「死ぬ！ 極東蛮人！」

甲高い笑い声が響いた。数人の赤や金の髪色の人間が、道の真ん中に立っているのが分かる。

一番背の低い、橙の髪を逆立てた男がもう一度こちらに向かって振りかぶろうとした時、煉瓦造りの高い塀の向こうから、大きな黒いものが落ちてきた。それは橙の男にぶつかり、男は倒れた。

「差別はよくないよ君達、あとね、ここの多数派敵に回すとは命知らずだ」

その声に聞き覚えがあった。星井さんだ、とデータをたどる間に、彼はばんざーい、と近くに居たスキンヘッドの男を両手で投げ飛ばした。男の腰が塀に丁度乗り、体が不自然な方向に折れたように見えた。やっちまえ、と近くで白と茶色のトイ・プードルを二匹散歩させているおばあさんが叫んでいたが、男たちは倒れこんでいる仲間を置いて散り散りに去っていった。警察呼んだからなーという星井さんの声は聞こえているか分からない。おばあさんは少し微笑みながら何も無かったかのように悠然と去っていった。

「あらこの前のお嬢ちゃん。平気？」

走りよってきた駒津さんの目は丸い。彼の見た目が細いた

めに先ほどの立ち回りが起きる可能性を殆ど想定しなかった。

「怪我してない？ なんかやかましいと思って来てみたら知ってる奴でびっくりしたよ」

「平気です。さっきのは」

「反アンドロイド主義者。ファッション感覚で暴力って世の中とんでもないな」

手を差し出される。私は掴み立ち上がった。

「私がアンドロイドだと」

「いや。アンドロイドを発展させつつける、特定の人種を攻撃しているわけだ。無宗教で職人気質で倫理知らずだとね。アンドロイドの作成が神に反するだとかで」

「けれど今先進国はほとんど傭兵アンドロイドを量産しているはずでしょう」

星井さんは道の傍の花壇の縁に私を導き、そして座らせた。

「真一のやつてた研究だろうなあ。問題は、ごく一般的な人間を作るみたいなものだから。まあ教授が真一の研究を全部自分のものにしたから真一は比較的平和にしてるんだろうけど。嬢ちゃん、気をつけるんだぞ」

私の膝をハンカチではたきながら星井さんは言う。

「何をですか」

「今みたいに、その人種ってだけで攻撃してくるのは稀だろうけど、ロボット工学専門家で日系ってだけで攻撃の対象になるんだからな、真一もいつ狙われるか分からないってこと」

「真一さんが」

「奥さんは鬼籍に入ってるけど、あいつ娘が居るんだ。一緒に暮らせないのはそういう理由もあってのこと。嬢ちゃんに何かあっても心配すんだろ」

「私は、痛覚がないから大丈夫です」

星井さんは大きな右手で頭をがりがり搔いた。私は口を開く。

「あなたは」

「ん？」

「あなたは私を人間みたいに扱うでしょう。ハーランさんとも特に何の変化もなく。何故です」

「……あの嬢ちゃん。俺はアナログ人間だから機械との接し方とか、人間の接し方とか解らんよ。嬢ちゃんの言うみたいに、こいつはこうだからっていう白と黒で語れないのさ」

グレーを知ってるんだ無駄に歳だけ食ってるから。と私の頭を二度手で触れて、買い物店の前で待って居た星井さん

に家まで送られた。

おかえり、と真一さんは言う。私には解らない感覚を言葉にしようと、真一さんはたくさん話をするようになった。私が黙れば、そっとかがんで視線を合わせる。真一さんがそのように力を尽くしても私には心も感情も生まれることはなかったが。

おいしいよ、すごく、と彼は毎度欠かさず言う。ポトフをすくうスプーンの左手に一つだけある指輪の意味を今の私は知っている。

点けっぱなしにしていたテレビのニュースで、有名科学者のスキヤンダル、というテロップが流れるまでは昨日までとの繰り返し。皿を洗いテーブルを拭いてお茶を入れて、スリープモードに入るはずだった。

星井さんの案内で真一さんの家から離れ、警備の敷かれた施設へと移った。星井さんは、隣の部屋にレイがいるからさ、ご飯よかつたらつくってやってね。と両手を合わせてウィンクをしてみせた。そして部下が背後に居るのに気づいて、私と真一さんに背中を向けた。たまに見える横顔、目の印象の強さが処理しきれずにしばらくフリーズした。

「お前絶対の外に出るなよ。どうしてもって時は許可を取って誰かについていてもらえ」

「泰孝は」

「仕事辞めるつもりだったのになあ。しばらく戻らないから」
世界一面倒くさい大とりものだよ、と一言だけ言い、そして次の朝には星井さんの姿は無かった。そのまま半月を過ぎた。

かつての部屋ではなかったけれど私が掃除して、買い物に言っている間に、病院と併設されている研究機関で、真一さんは居なくなつた。五時間後の明朝、奥さんのお墓の前で倒れているのが発見された。頭が割れていたと聞いた。私は病院の長くて緑の椅子に座ってリノリウムを眺めていた。何時間経つたか知らないが、目の前がやや陰りカメラを前に向けた。星井さんだった。右手と右脚が無くなつていた。左手に杖を一本だけで、視線を合わせることもなく、彼は私を見下ろしていた。頭にも包帯が巻かれている。

「どっちが人間なんだかわかりやしねえな」

私のデータの中には正しい反応は見つからなかった。

「奥方との結婚記念日だったんだ」

悪かった、とふらつきながら星井さんは頭を下げた。私になにも言わなかった。大丈夫ですか、と言おうとしたら、星井さんは、何も言うな、とそう一言こぼした。星井さんは私の前に立っている。私には好悪の感情は勿論ない。ただ、目を見て話す、初対面の時三秒間笑顔が崩さない、顔のパーツ配置が平均的、言動が似ているなど、心理学的に根拠のある事があれば相対する態度の種類が変わるというだけだ、と真一さんに聞いた。思えば最初から、この人への接し方は最高ランクなのだと思つた。

「嬢ちゃんの寄る辺を守れなかった。すまない」

そんなことはない、と言おうと思つたが、何も言うなど言われていたのだった。私は軽く会釈をした。

星井さんは隣に座つた。マスコミと傭兵アンドロイド製作・派遣会社と反アンドロイド組織、政府高官が話に登場したが複雑な話でよく解らなかつた。

「真一な、命が助かつて、意識が混濁してたり何かしらの後遺症がある可能性がある。どうする嬢ちゃん」

何も言うな、と命令されている。私が世話をすればいいことだ。自分を指さした。

「……嬢ちゃんはバカだなあ。あと、声出していいから」

馬鹿という言葉に対する反応を探しかけて、処理は止まった。星井さんは笑っていたからだ。

「……あなたの言葉と表情はあべこべだ」

「はあ？ あー、バカってのは、いい子だねって意味」

「あなたがばかって言ったら、誉め言葉と思えばいいの」

「違うぜ多分」

いつまでそう話していたのかは知らない。いつの間にか私はスリープモードになっていた。手術中のランプが切れる音は、耳には届かないままで。

「記憶喪失」

「ドラマみたいでしょう」

「僕が」

「あなたが」

何度も繰り返した会話だということを、あなたは知らない。「あなたが頭を怪我して、そのせいで、今は何も思い出せないかも知れないけれど、そのうち少しずついろんな事を思い出してあるとき急にまた記憶が無くなります。一週間持ったかと思ったら次は二日で無くなったりします。考えてもど

うしようもないので気にせずに」

毎度きれいに振り出しに戻る彼に自分よりも機械らしいのではないだろうかと考えてしまった。こまつ、とたどどしく発音する彼に先回りして、しんいち、と一文字ずつゆっくり発音する。

「えっと、あなたと僕は一体どういう、その」

いつも意識しすぎて声が震える質問だった。

「あなたがそういう状態なので、世話をしています。あなたの、あなたの作ったアンドロイドの真白です」

二回目に生まれたあの時、私もこんな風な目をしていたのかもしれないと思った。

「僕の記憶が無くなるのあなたの名前のせいではないですよ。あ、いや、可愛らしい名前ですね」

そう言う彼の左手、薬指に指輪はない。まだ反アンドロイド主義者がいる中で、奥方や娘さんの事を思っただけがここを出ようとする可能性がある。だから、居室の隅の、小さな棚。一番下の引き出しに、青い箱の中に入れてある。

僕は自分がこうなることを知ってあなたのことを作ったのですか。

その前からあなたの世話をしていましたよ。ここですか。

郊外のマンションです。ちなみに外には出られませんから。僕が忘れる度にあなたは毎回こんなことしてるんですか。そうですよ。けれど日常動作は忘れていないみたいですね。面倒くさくありませんか。

気にしないでください。

君の人生を奪っているようなものではないですか。

アンドロイドですから。役目をもらわなくて人生もなにも無いでしょう。

申し訳ないです。

謝らないでください。

いつも絶え間無く与えられる質問に簡潔に答える。そうして日々を過ごす。掃除をして洗濯をして料理を作って。何も変わることはない。

そしてハーランさんの家に料理を持っていく。そして何の感情も表そうとしない彼を見る。今は星井さんが面倒を見ているが、久々に星井さんが帰ってきたときに、一緒にハーランさんの部屋で過ごした事があった。

「かぞくになればいいのに、いっしょ」

珍しく、ハーランさんは何日ぶりの食事をとった。一人だと医者さえもはねのけてしまうのだ。

「レイ、これからは一緒にいるだろうが。いいから飯食えよ」
なあブラザーと言いながら、星井さんは若干衰弱している元相棒に、おぼつかない左手でスープを飲むよう促していた。

星井さんは辛くないか、と声をかけてきた。私はいつも通り、感情はないと答えた。

かぞくになればいい、いっしょ、という言葉をも、何度も取り出しては再生している。例えば、あなたは誰ですかと聞かれたとき。僕との関係は、と問われたとき。考えるだけで、口にしたことはない。

何度も繰り返した生活だった。目を見て、比較的ゆっくりと喋ると、真一さんは落ち着いた表情になる。ご飯を作ればおいしいと言ったし、私を夜中スリープモードにすることも教えた。風呂場の掃除だけは、お願いするようにした。今回は四日目に、泰孝さんの事を思い出した。

そして今までに無かった質問が出てきた。

「僕がアンドロイドを作ろうと思ったのは、誰かを生き返らせたいって思ったからだ」

「誰かとは？」

「それが思い出せない」

「私も考えてみますね」

夜、無意識に、私の体は動く。部屋の隅の小さな棚の一番奥の引き出し。青い、小さな小箱。力を入れると、二枚貝のように開く箱。銀色の輪っか。

「真一がいなくなるのが不安か」

「真一さんの役に立つのが、私のいる目的ですから」

「なんか若い助手？　の人が言ってたけど、嬢ちゃん、中枢部に負荷が異常にかかっているって。ちゃんと休んでるよな」
あぐらをかいた背中に寝ているハーランさんがもたれてくるままで、星井さんは言った。

「休んでいるし、私には疲労も」

「痛覚もありませんから！　って言うんだろ知ってるよ」

「それが私が生きている意味なんです」

あのな、と星井さんは背を伸ばし、ハーランさんを床に落ととして言った。ふにゃ、という声が聞こえた気がした。

「嬢ちゃん、飯がうまいし。べっぴんさんだし。いい子だし。

仕事ならいくらでも与えてやるよ」

だからそんな風におじさんを悲しい気持ちにさせるのやめ

ろ、おじさんは繊細なんだからな、と星井さんは言った。見た目は何歳なのか、本当に青年に見えるのだけれど、こういう言い聞かせかたや語り方に、私は彼の生きている数十年分の長さの違いを思う。

私が仕事をしすぎているわけではない。そう思いながら真一さんの部屋に帰った。入ってすぐ、リビングの隅に真一さんが居ることに気づいた。

「何をしているんですか」

「……昨日、見つけたんだ。これ、すごく懐かしい気がするのだけれど」

手の中に、開かれた青い小箱があった。私の体は勝手に動いた。止める、と指令しても動きは止まらなかった。真一さんに大股で近づいて、手の中の小箱をもぎとった。

「……これはいけません」

乱暴な行動とは不釣り合いな、小さな声しか出なかった。

「けれどそれは僕の記憶にとっては」

「ダメなんです、ダメです」

小箱を閉じる。固い箱同士がぶつかり合う鈍い音がする。一番下の引き出しをあけ、小箱を投げ込み、けたたましい音を立てて閉めた。その音で目を見開いて静止している真一さ

んに気がついた。失敗をした。いや、彼はあの指輪がなんなのか気づいていないのだ。しかし。真一さんが何も挿んでいない手を、ゆっくりと握りしめた。

汚れた皿を持ったと思ったら、気づいたら洗ってしまった。テーブルを拭こうにも、布巾は椅子の背にかかっている。もうやり終えたのだ。上の空無意識でほとんどの行動をしている状態は異常だ。何より危険だ。何を考える。やるべきことはすべて終えた。あとはスリープモードにして、体を休めるべきだろう。

真一さんの部屋に行く。扉を開けると、彼がベッドに布団も掛けずに寝ころんでいるのが見えた。いつもはまっすぐの姿勢で寝ているし、もう少し遅い時間に寝入る。そうなるのは、たいてい、すべての記憶がリセットされる前触れだった。

また振り出しにもどるのだ。今日のことも忘れてしまうだろう。ほっとして近づく。彼の体の下から布団を引っ張りだして、上からかけた。

ばたん、と空気が鳴った。ベッドの反対側に行くと、青いノートが床に落ちていた。布団の中に入っていたのだろう。何かが書いてあるのか、表紙をめくった。

・ 名前は駒津真一 度々人生での経験した記憶を失っている

横に正の字が九個並んでいた。

・ 真白さんはアンドロイド。僕が作ったらしい。

・ 部屋の外が景色がよいが出てはいけない

・ ご飯がおいしい

・ 真白さんが笑う 見たことがないがもう終わりみたいだ

・ 泰孝と大学時代ルームシェアしてた。時間が経っているらしいが見た目が変わっていなくて驚く

真っ白に戻る前の記憶が、そこにあった。

・ 何か思い出す毎に書いていけば、補完できる可能性

・ 前が二日で終わったらしい。二日。

ページをばらばらとめくる。今や最後のページまで三枚を残すのみになっている。その何か書いてある一番最後の行から二つ上が、黒く塗りつぶされている。

・上の行書き損じ

丁度左胸の奥の方が熱を持ちました。ふ、と一度深く息を吐いた。真一さんと同じ部屋にいてはならない、と思って動いた。扉を閉めると立ち上がれなくなって、その場に座り込んだ。

指輪を見せたら真一さんが逃げ出して危ない。

嘘だ。

人間という存在が私には理解できない。私は嘘をついている。常に嘘をつき続けている。すると中央演算装置に負荷がかかる。

苦しい。code Aに背いているから。それ以上の理由はない。

嘘をついています。ごめんなさい。真一さん。ごめんなさい。ごめんなさい。私はあなたに、ひどい嘘をついています。こう言い続ければ、何かが表せるような気がする。言いたいことはこれではないような気がする。ごめんなさい。ごめんなさい。星井さん、私いい子じゃありません。ごめんなさい。ごめんなさい。

扉が開く音がした。

「……ここはどこですか」

今更振り返らなくとも何が起きたかは理解できる。背中越しに声を聞く。

「あなたの家です」

「僕は……」

「あなた、記憶喪失になっているんです」

「記憶喪失」

「ドラマみたいでしょう」

「えっと、僕と、あなたは一体どういう関係ですか」

「私は、あなたの」

私があなの手で二度生まれた事を、あなたは知らないでしょう。

「あなたの作ったアンドロイドです」

ごめんなさい。ごめんなさい、真一さん。

アンドロイドアンソロジー

2012年1月24日発行

編集人 かまたり 鴨居つる

発行所 広島大学文団BOX